

キャラクター名
アラン・D・マクウェル

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ		ワークス	記者	カヴァー	新聞社デスク
	ウロボロス			年齢	76歳	性別
オプション	覚醒	探求	衝動	吸血	初期侵食率	49%
出自	貧乏	経験	成り上がり	邂逅	ビジネス	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	30
肉体	3	0	0			3	行動値	8
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	8
精神	3	1	0			4	戦闘移動	13
社会	0	0	3			3	全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC			交渉		1
回避			知覚	1		意志			調達		
運転:	2		芸術:			知識:レネゲイド	2		情報:ウェブ	2	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
情報収集チーム(コネ)	
コネ: UGN幹部	
コネ: 警察官	
コネ: 情報屋	
コネ: ハッカー	
コネ: マスメディア	
インクリボン(使い捨て)	
思い出の一品: ロケットペンダント	
クリスタルシールド	
蛇王の外套	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
遺産継承者	P	N		
起源種	P	N		
妻子	P 慈愛	N 悔悟		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6 残り財産P: 1

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
マグネットフォース	1	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果:	ガードリング/1メイン1回							
磁力結界	3	3	オート	至近	自身	自動	-	
効果:	ガード時宣言/G値+(Lv)D							
マグネットチェイン	1	4	オート	至近	自身	自動	リミット	
効果:	<磁力結界>の直前使用/ガード不可・リアクション不可の攻撃でもガード可能に/ナリオ1回							
雲散霧消	5	4	オート	至近	範囲(選択)	自動	-	
効果:	ダメージ算出直前/HPダメージ-[Lv×5]/EFによるダメージのみ/R1回							
原初の紫: 孤独の魔眼	2	4+1	オート	視界	効果	自動	-	
効果:	対象を単体に/ナリオLv回							
原初の白: デモンズウェブ	4	2+2	オート	10m	単体	自動	80↑	
効果:	ダメージ算出直後/HPダメージ-[Lv+1]D/R1回							
ウェポンマウント	2	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果:	常備化pt[Lv×5+5]以下のアイテムを所持→選択:クリスタルシールド/インクアチがで装備・所持の切り替え可能							
イーザーフェイカー: 完全演技	★							
効果:	冷徹になってゆく心を隠し続けている							
電子使い	★							
効果:	電子機器なしで電磁記憶媒体を読み取る							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

一人称: 私、(からかったように)ワタシ
二人称: ~くん、Mr~, Ms~

イギリス南東部にある小さな街出身。WW2真っ只中に生まれる。戦争の最中で生まれ爆撃により父と兄が死亡。戦後の混乱で母と姉、母が身籠っていた新たな父との子も死亡しスラム街で孤児となる。そんな中街で見かけた一人の男(フィン)に惹かれ、自分もあなりたいたと努力し、なんとか教育を受け記者として働くように。

働きだしてから妻と子供をもうけ、幸せに暮らしていた。そんな中で、その頃は名前もついていなかった「遺産」と出会い、それに選ばれた代償のごとく家族を亡くした。「遺産」に見初められたからなのか、はたまたもともと素質があったからなのだろうか、彼はオーヴァードに目覚める。この力を隠しながら生活をしてきたが、レネゲイド拡散ののちにイギリスUGNに所属。その後、日本支部へ「遺産」のために赴くことがあり、そのまま日本支部へ。

そして現在は新宿区帳町に支店を置く新聞社のデスクとして働いている。

日に日に冷徹になりゆく心を<完全演技>にて隠すまでして、「遺産」について調べるのは冷えた心であっても妻子の死の真相を知りたいからなのだろうか。はたまたそんなことはもうどうだってよく、ただ自身の好奇心の赴くままに行っているのだろうか。いずれにせよ、理由は分からない。長年使い続けた<完全演技>は、彼自身の思考を浸食させる。他者に優しい姿が本心からなのか、冷徹な心を隠しているのかも本人はもう分からない。

それでもなお——彼は今日も、夜の明けない町を走る。理を知る、ただそのために。